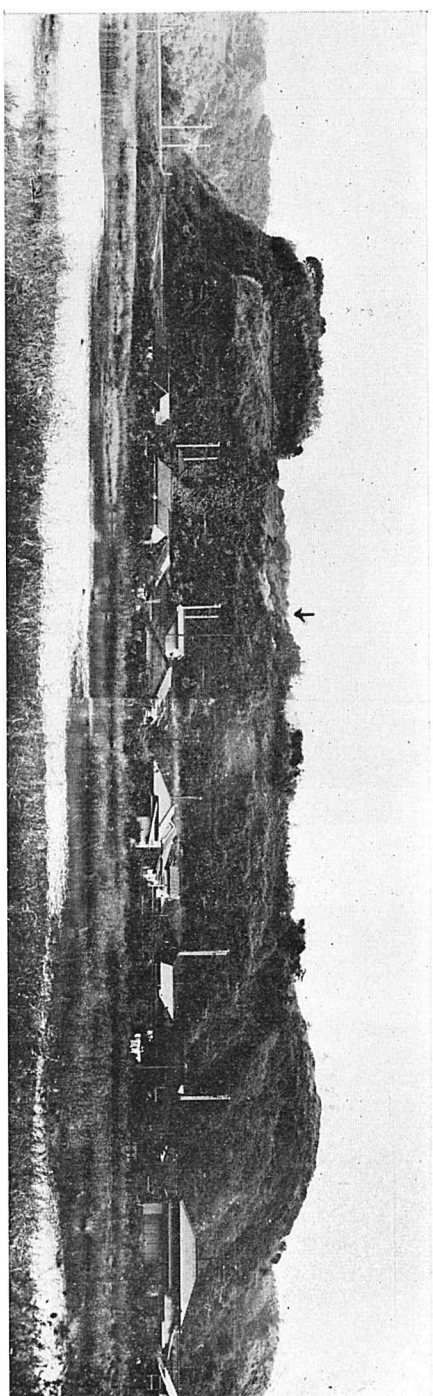
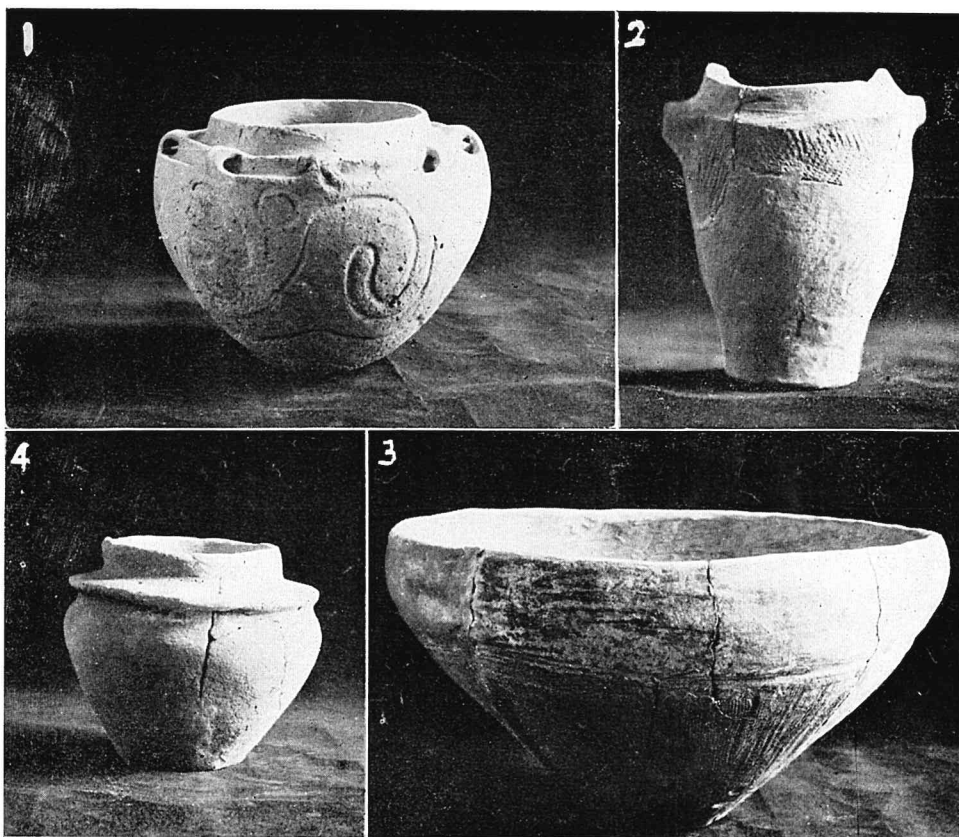
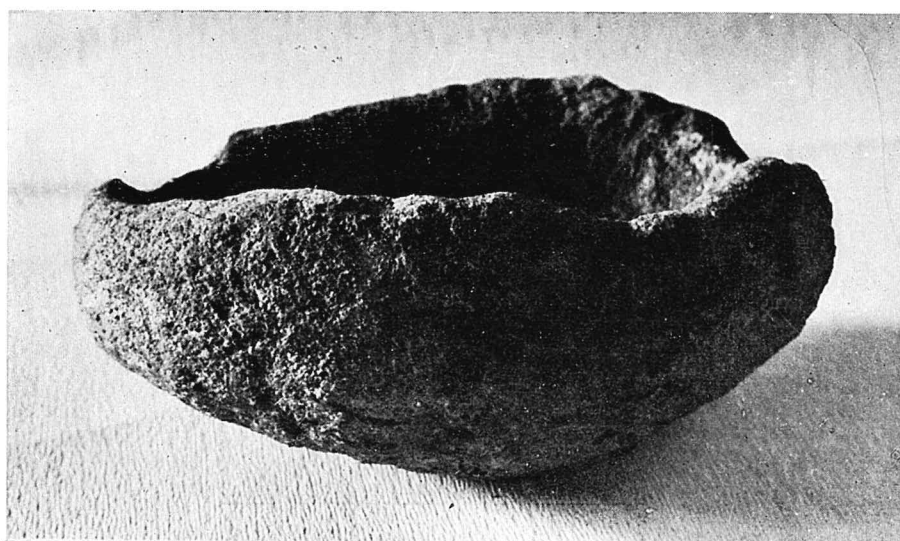




横須賀市吉井坡山(南方より、↓の下第一貝塚) 神沢勇一氏撮影



1 - 3 吉井城山第一貝塚上部具層出土 4 横浜市大道遺跡出土



凝灰岩製のつぼ（横須賀市吉井城山第一貝塚出土）

横須賀市吉井城山第一貝塚調査概報(二)

赤 星 直 忠

一、前 が き

概報(一)には本貝塚全体について述べたほか、特に下部貝層以下について主として記述した。その後下部貝層以上の遺物についての調査が進められたので本報にはこれをもととして下部貝層を覆う混貝土層(中間層)・これを覆う上部貝層・更にこれを覆う上部貝層上の土層について概報するものである。それらの各層遺物についての詳細な調査結果は土器・骨角器・石器に分けて別に記述されている。

二、中 間 層

下部貝層を覆う混貝土層である。この層は下部貝層表面の斜傾につれて斜傾し、厚薄一様でないがG3北端あたりから一様に厚さ六〇cmくらいとなるが、その下半部には貝を混在しなくなる。その表面は大体平らであり、上部貝層をのせている。しかしこの上部貝層もG3北端にて急に薄くなって消滅し、その先は混貝土層として中間層中に混入する。中間層は混貝層であるがその混貝度は一様でなく、この間にはっきりとした層序をとらえることはできない。したがってこの層の下部に縄文早期末の土器を出し、上部に中期末の土器を出し、その中間にそれらの間に編年されている諸種の土器片を出す、それらを層として把握することはできない。

自然遺物——中間層を形成する混貝土層中の貝は層序として把握することができないから、中間層全体として把握するほかない。したがってそれらの貝について記述しても大した意味をつものではないが、中間層を構成した貝の種類といった程度であげておく。

二枚貝

マガキ パカガイ オノガイ ハイガイ マテガイ イガイ オキシジミ ウチムラサキ イタヤガイ アサリ

アカニシ サザエ イボニシ スガイ レイシ オーヘビガイ

マルツノガイ ヒダリマキマイマイ

中間層中から検出された獣魚鳥骨は比較的少量である。層序として把握することのできないものであり、たいした意味をもたないが次にあげておく。

シ カ（角・顎骨・肢骨）

イノシシ（顎骨・牙・肩胛骨・肢骨）

イ ヌ（牙）

イルカ（顎骨・歯・背堆骨）

マダイ（顎骨・頭骨）

クロダイ（顎骨）

スズキ（顎骨）

人工遺物——中間層から検出された人工遺物としては土器片が最も多く（林檎箱三個程度）、石器・骨角器は甚しく少ない。しかもそれらがどの土器と組合わされていたかについては全く把握することができないから、挙げての意味がないが、一応の資料として記しておく。土器だけは下部貝層から上部貝層までの間に経過した本貝塚の歴史を物語るものであるから、層序としての把握がなくとも重要である。

土器……下部貝層直上からは入海式を伴った茅山上層式土器が出土しており、これは極めて重要な意味をもつものである。本土器については既に岡本勇氏によって横須賀市博物館研究報告人文科学第六号「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器（一）」に述べられている。中間層中最もその量が目立ったものは関山式土器であり、従来三浦半島の関山式土器は出土量が極めて少ないため、その実態を充分把握できなかったものであるが、今回出土の資料によって本県内他遺跡出土のものと大差ないことが把握できた。このほか諸磯b式・諸磯c式・十三菩提式・阿玉台式・勝坂式などが少量ずつ検出された。この中、諸磯b式が比較的多い。上部a貝層直下には加曾利EⅡ式が存在しており、これは上部貝層のものとの比較資料となるが、その量は少ない。b貝層下には加曾利EⅡ式とⅢ式を出したがこれはa貝層の延長であるから当然の結果である。これらの土器に

關しては別項「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器（二）」（岡本勇）に詳述されているから参照されたい。

土製品……中間層出土の土製品中、特記さるべきものとして土偶断欠が二個ある。何れもどの土器に伴出したものかを把握することができないのは惜しい（第Ⅰ図）。A 長さ四・八cm 橢円形断面で一端は折損しており、他の一端は扁平になり、ゆるく片側にとがる。上面に斜縄文がおされている。先端は赤褐色だが、他は全体は黒褐色。土偶の片腕とみられる。B 長三cm、径二cmばかりの不正円柱状。一端は折損。他の一端は大扁平になっているが三日月形の深くぼみができている。側面はたて方向に太く浅い沈線まがいのものがみられる。半面は赤褐色、他の半面は黒褐色。土器の突起部ともみえないから、従来このような形の土偶の脚はみられないが土偶の脚部とみる方がよからう。このほか土錘が検出されているがこれは上部貝層直下の加曾利EⅡ式包含の部分からである。これ以下の混貝土層中からは全く土錘を検出していない。貝層直下検出の土錘中に繊維を混入する土器片使用の二例があるが貝層直下は加曾利EⅡ式土器を包含する部分であり、土器片が繊維を混入するものであっても、土錘として用いられたのは貝層直下の時期であり、その辺に散在していた土器片をひろって周を若干整え、上下に切目を加えて土錘としたものであることは明らかである。

石製品……中間層出土の礫は相当量に達し、これらの中から少量の石製品を検出したがそれらは伴出土器を明らかにすることができないから資料としての価値がないけれども、その大略を記述する。詳細については別項「横須賀市吉井城山第一貝塚の石器（二）」（赤星直忠）を参照されたい。中間層中から検出した礫には多孔質安山岩・多孔質石英安山岩・玄武岩・輝緑岩・黒曜石・硬砂岩・凝灰岩・石灰質砂岩・泥岩・泥板岩・砂岩などがある。これらの礫中には火中されたためその周に火はね痕を残すものや変色したものなどもある。礫のままで使用されたものが多く、長味のある礫ではその端が使用されて打痕を留め、丸味のある礫ではその周に打撃による磨減（敲石）や磨り石として使用による平滑な磨減のあるもの、礫片の周に打かきあとのみられるもの、所謂石皿や凹石としての痕せきを残すもの、礫の一端を打欠いて刃とした礫器や所謂打石斧として整形されたもののほか、長味のある扁平自然石の一端を打欠いて刃部とした打石斧や同じく一端を砥にかけた磨石斧も各一例ある。黒曜石片はあるが石鏃は検出されていない。

骨角器……中間層出土の骨角器は他の遺物と同様、伴出土器を明瞭にし難いので資料として重視することができないが、総数八点検出されている。即ち釣針形角器断片一、鹿角枝尖端利用の尖頭器一、尖頭器破片五、その他一などである。その詳細については別項「横須賀市吉井城山第一貝塚の骨角牙貝器（二）」（神沢勇一）を参照されたい。

三、上部貝層

上部貝層は大体四〇cmの厚さをもって傾斜につれて堆積し、G3北端にて急に薄くなり、消滅するが、その延長は厚さ約二〇cmの混土貝層となつてL3北端にまで達し、さらに北方へつづいているが混貝の量は次第に減じてゆく。G3北端にて上部貝層が急に薄くなって消滅している部分では、これに代つて別の上部b貝層が薄く上に重なり、次第に厚さを増し、厚さ二〇cm乃至三〇cmで上部a貝層の延長である混土貝層の上を覆ひ、L3北端では厚さ一〇cmに減じ、尚北方に つづいている。このa b両貝層はともに加曽利EⅡ式及びⅢ式を包含しており、b層がa層の後に堆積したことは確実であるが両層間の土器でその差異をはっきり区分することは困難であり、a層がb層に比して加曽利EⅡ式の量がⅢ式よりも若干多いという程度である。かつ、両層間の遺物に特記できるような区別が全く認められないので、両層遺物を特に区別して記すことをせず、これを一つづきの上部貝層として一括する。遺物中、土器・石器・骨角器に関しては各独立した報告として別に記されているから、これを参照されたい。

自然遺物——貝について：：上部貝層を構成する貝と下部貝層を構成するものとは一見して甚しい差異があることが知られた。上部貝層を構成するものは小形巻貝が主をなし、これに少量の二枚貝を混ざるようにみられた。即ちイシダタミ・スガイ・クボガイ・コシダカガンガラ・バテイラなどが目だつ存在であり、これにカリガネエガイ・ハマグリなどがやや目だっていた。貝層を構成するこれらの貝について概略を記すと次の如くである。イシダタミは何れも小形であり、大形のものはない。スガイは大きいものも、小さいものもみられるが、大形のものは少ない。クボガイ・コシダカガンガラ・バテイラなど今も海岸でみられる程度の小さいものであり、特に大形のものはない。バテイラでは径三cm以下の小さいものもみられた。それらにつづいて目につくものとしてはレイシ・イボニシがあるが何れも小形であり、レイシなども大形はなく、せいぜい中形どまりであった。アカニシは小形のものが多く螺高五cm内外のものが普通であり、七cmのものは大きい方であり、中には三・五cmの小さいもので食われていた。稀に大形のものがみられたが殻口や殻口に近い側面が大きく打欠かれたものがあつた。これは身を出すためにとられた手段である。殻口を打欠くものは小形のものにもみられた。エザエは螺部が打割られたものが普通であり、多くは蓋のみが検出されるのであるが、蓋も多きいものは少ない。螺高五cm以下の小形のものが打割られることなく検出されたもののがかなりある。オーヘビガイは稀にしか検出されなかったが小さいものばかりで中には径五mm以下のものもみられた。バイは数は少ないが何れも大形から中形にかけてのものであり、イソバショウもやや目立つ存在であつた。二枚貝は数の特に目立つものなく、その中でも目立つカリガネエガイも小形のものばかりであり、ハマグリも殻長五cm内外

のものが多く、最大のものも九 cm であった。これらにつづく存在であるマガキは何れも小さいものであり、稀に長一五 cm くらいのももあったが、多くは八―七 cm 以下であり、三―五 cm の小さい殻も多かった。オキシジミは稀に四・五 cm くらいのもみられたが、多くは三―五 cm の小形のもであった。オニアサリも稀に六 cm くらいのもみられたが、四―五 cm のものが普通であり、三・五 cm 前後の小形もみられた。ウチムラサキなどは数も少ないが一〇 cm 内外の小形であり、ハイガイも極めて小さいものばかりで、四・五 cm のものが最大であり、しかもそれは極めて少なかった。多くは三 cm 前後のものであり、最小二・五 cm というものもあった。イタヤガイは二枚貝中ではやや目立つ存在であり、大きいものが多かった。頭部のこげたものがあり、火であぶって口をあけた証拠になるものと思われる。又、貝殻が縦に二つに割られたものが数例あった。その理由は不明。ベンケイガイは数は少ないがその中には波で洗われてひどく磨滅したものが数例あった。これは食用としてのものでなく、装身具（貝輪）の原料としてのものと解される。実験によるとベンケイガイの新しい殻よりも波に洗われた古いものの方が打ぬいて輪とするのが容易である。以下貝層検出の貝を列挙する。（○多、△少、×稀）

巻貝

○イシダタミ	△アカニシ	×ミガキボラ
○スガイ	△サザエ	×ウミニナ
○クボガイ	△イソバショウ	×テングニシ
○コシダカガンガラ	×バイ	×ウシノツメ
○バテイラ	×オーヘビガイ	×ボウシウボラ
○レイシ	×ナガニシ	×イソニナ
○イボニシ	×ヤツシロガイ	
×ヒダリマキマイマイ	×ナミギセル	
二枚貝		
○カリガネエガイ	△オニアサリ	×バカガイ
○ハマグリ	×イタボカキ	×シオフキ

△アズマニシキ	×アサリ	×コベルトフネガイ
△ハイガイ	×カガミガイ	×マテガイ
△イタヤガイ	×ウチムラサキ	×オーノガイ
△マガキ	×オキアサリ	×アカガイ
△オキシジミ	×アケガイ	×ミルタイ
×ベンケイガイ		

巻貝二〇種、二枚貝二二種、陸産巻貝二種合計四四種が数えられたが、全体的に甚しく小形のものばかりであり、このような小形のものまで採集せねばならぬほど、貝が減少していたことを物語るものであった。下部貝層と比較して大形のものが見られないことは、生活環境が貝の生棲に不適当となったためか、貝をとりつくしてしまったため大形のものがなくなっただかであろう。下部貝層に比して種類も減じているのは前面の海がそれらの貝の生棲に不適な状態になったからか、彼らの行動範囲内からとりつくしてしまったためかわからない。前面の入江の浅海化ということも考えられるし、黒汐の流れが沿岸から遠のいたというようなことも考えられるが、直接の原因は彼らの行動範囲内から貝がとりつくされたということが大きい原因であったと考える。しかし貝層の堆積がなくなっても尚その上に厚い遺物包含層の存在していることは環境の変化により食生活に貝が重要さを失ってからも尚この地が生活地として存続しつづけていたことを物語るものである。しかしこれは貝から考えられた一つのあらわれであり、自然環境の変化は住民がやがて何れかへ移動する原因となったものであらう。

獣魚鳥骨……貝層内に包蔵された骨片の全部を採集したがその量は比較的少なく、林檎箱一杯程度であった。これらの中、量的に多いのはシカとイノシシであり、イルカと思われる海獣骨がこれにつぐものであった。魚類ではマダイの頭骨が一九あり、これが目立つ程度で他の骨は極めて少ないものであった。これは貝層の薄いことからみても当然のことと考えられる。サメ類の脊椎骨が数種あるが詳細不詳。鳥骨は極めて少ない。人骨がわずかに検出されているが特に埋葬されたとみられる状態のものでなく、他の獣骨と同様な断片として貝層内から検出された。以下記す上部貝層内の骨類の分類は金子浩昌氏にお願いしたものである。

哺乳類

○イノシシ(歯・牙・顎骨・肩胛骨・肢骨)

○シ カ (歯・顎骨・角・肩胛骨・肢骨)

サル (顎骨・肢骨)

アナグマ (歯・顎骨・肢骨)

ウサギ (顎骨)

タヌキ (顎骨・肢骨)

イタチ (顎骨)

イヌ (顎骨・肢骨・脊椎骨)

イルカ (肢骨)

魚類

マダイ (顎骨・頭骨)

クロダイ (顎骨)

ヘダイ (顎骨)

コチ (顎骨)

イシダイ (顎骨)

カンダイ (咽頭歯・顎骨)

カジキ (顎骨)

マグロ (脊椎骨)

スズキ (顎骨)

ハタ (顎骨)

ボラ (雑骨)

ドシザメ (脊椎骨)

アオザメの仲間（脊椎骨）

鳥類

ウミウ

爬虫類

ウミガメ（顎骨断片）

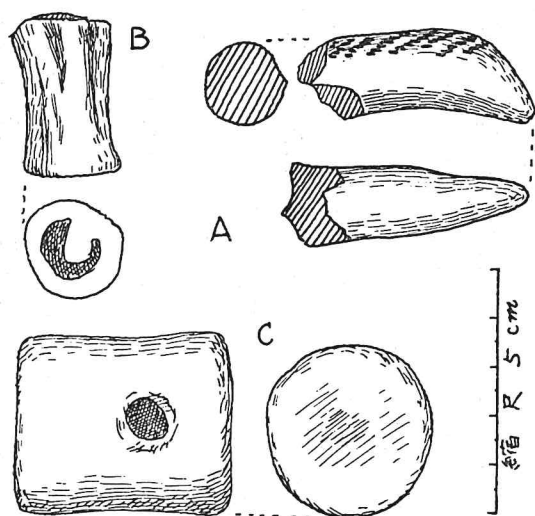
花虫類

造礁サンゴの一小塊がある。長五・五 cm 、径一・二 cm 内外

糞石：…二例採集されている。長四 cm 、径二 cm 、長三 cm 、径一・八 cm 。

人工遺物——上部貝層出土の人工遺物の主たるものは縄文式土器の断片であり、その量は林檎箱十二三個。それらは縄文中期加曾利EⅡ式及びⅢ式に属するものであつた。上部貝層がa b両層に分離できたことは既述の如くであるが、両層にはともに加曾利EⅡ式及びⅢ式が包蔵されており、a貝層はb貝層に比してⅡ式が多いという違いしか把握されていない。a貝層直下にはⅡ式のみ、b貝層直下にはⅡ式及びⅢ式がみられたのはa貝層の延長として当然の結果であつた。a貝層直上は耕作土のため資料なく、b貝層直上には加曾利EⅢ式が最も多く、称名寺式・堀内Ⅰ式を混じ、又加曾利EⅡ式少量を混じた。加曾利EⅡ式は口縁から胴上半にかけて外に丸くふくれ、所謂キャリパー形を持つものが多く、口縁に添う部分に隆線（又は沈線）で横長の長楕円形を連続して配したり、その間に渦文を配したりするものが多く、そのほか口縁に添う部分に連接して文様を配するのが普通である。これらの文様部の下方は沈線や隆線でたてに区切った中を縄文で埋めるといったものが多くみられる。加曾利EⅢ式は胴上半のキャリパー形が目立たなくなり、又は全く失なわれて上開きの深鉢形になる。口縁添に配されていた文様が消滅し、口縁をめぐって横方向の羽状縄文がめぐらされ、又は口縁をめぐって円点文が配され、又素文部が出来る。これらの下は二沈線をもってたて方向に区切られる。これらの二沈線は他の隣接二沈線の上部和弧状に連接し、時にはその頭部が二弧状になるものもあるし、二重沈線の場合もある。これらのたて長弧状沈線で囲まれた中は斜縄文で埋められるのが普通である。土器に関しての詳細は別項「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器（二）」（岡本勇）を参照されたい。

丹塗土器の存在がやや目立つ。それらには小形の壺形土器と甕形土器のほか、やや大形の鉢形土器があることが知られた。内部に丹を入れたた



中間層及び上部貝層の土製品

め内面の丹の付着するもののほか、土器文様の一部として丹彩されたものがあり、丹彩の効果をより大きくするため、黒色に仕上がった土器に丹彩したものであることが確認された。丹は所謂ベンガラと呼ばれる酸化第二鉄であり、沈澱褐鉄鉱である黄土を人工的に熱することによっても得られたであろうが、多くは天然産の赤土（丹）が用いられたと考えられる。これらの赤土（丹）は火山地方で天然に産出する。本県では箱根火山に産出し、仙石原の一部には厚さ1mに及ぶ丹の層が発見されており、大涌谷には極めて赤色の濃いものがあることが確認された。これら丹についての詳細は別項「横須賀市吉井城山第一貝塚の丹彩土器について」（赤星直忠）を参照されたい。彼らが丹色のほかに黒色・白色の顔料を持っていたであろうことは充分推察できることであり、彼らが認識することのできた色彩の中、顔料として作ることのできたものは持ち得たであろうと想像される。中国古代にも丹・黒・白・黄土の色彩は早く知られていたという。吉井貝塚人が丹・黒・白のほかに恐らく黄土色をも持っていたであろうことも想像される。黄土は沈澱褐鉄鉱のしみこんだ土として各所に存在するし、丹原料としても知られていたと考えられるからである。詳細は別項「吉井城山第一貝塚人の持っていた顔料」（赤星直忠）を参照されたい。

土製品……A、有孔円柱形土製品。長4・2cmの円柱形（正しくは少しく楕円形。長径3・4cm、短径3・2cm）両端は平らで中が少しくぼくなる。円柱形の側面（中央より若干片方の端に片よって）に径8mmほどの貫通孔がある。側面の一部に丹が塗られていたような痕跡がみられる。用途不明の土製品である（図C）。B、土錘。上部貝層直下、貝層内、貝層上土層にわたって検出された。貝層直下（二六個）・貝層内（a層一三個、b層六五個）・貝層上（二九個）を通じて多くの土錘が検出されたが、それらの間には特に形態上及び大きさの上で異なるところは認めることができない。それらの土錘は極めて粗雑に周をすりへらしたものが多く、特に念入に整形したとみられるものもなくはないが、その数は極めて少ない。それら土錘に用いられた土器片はその辺に投げすてられていたものの中から、手あたり次第にひろって材料にしたと思われるものであり、中には丹彩のあとのあるものもあるが特に丹彩のものが選ばれたとは考えられない。これらの土錘は大部分のものが縦に長いものであり、大体の形

は楕円に近いが特に楕円形を目ざして整形したとはみられない。中には矩形に近いものも、円に近いものもあり、甚しいものは土器破片の角ばった部分を多少すりとった程度のももあり、それらには不正三角形に近いものもある。切目は縦に長い形のものに対してその長軸端に各一個作られており、切目はすりへらす方法によってつけられている。短軸端に各一個の切目がつけられたものもあるが、それは極めて稀である。大きいものは長さ7cm内外のものがあり、小さいものは長さ4cm内外のものもあるが大多数のものは5cm内外である。これら土錘の用途は従来網のおもりとして使用されたものといわれている。たしかにそのような用途もあるが、そのほか一本釣の錘としての用途も考えてよいであろう。

石器：…この層から検出された礫には伊豆半島から運ばれたとみられる多孔質安山岩・石英質安山岩（根府川石）・玄武岩・浮石・黒曜石。三浦半島特に小原台礫層から採取されたとみられる石英閃緑岩・輝緑岩・珪質岩・硬砂岩・砂岩・ホルンフェルス。本貝塚の対岸久村から採取されたとみられる石灰質砂岩・蛇紋岩・角閃石閃緑岩。本貝塚の周辺からとられた砂岩・泥岩のほか、秩父方面から運ばれた緑泥片岩がある。これらの礫の中、円礫の中には火中されたため火はねの痕をとどめるものもあり、火熱により変色したものもみられた。中間層に尚みられた礫を打わったものをそのまま利器とする原始的手法の石器は極めて減少し、僅か数例を認めたにすぎず礫斧も少数認められた。凹石・敲石・磨石・石錘・石杵など自然石をそのまま用いるもののほか、打石斧・磨石斧・石棒・石鏃などの定形石器が目立つに至った。石器についての詳細は別項「横須賀市吉井城山第一貝塚の石器（二）」（赤星直忠）を参照されたい。

骨角器：…上部貝層検出の骨角器は甚しく少ない。総数一四点。即ち鏃形骨器三、尖頭器二、銚形骨器一、大形銚形骨器の有刺部破片一、その他七である。特記すべき資料なく、縄文中期貝塚から検出されるものと異なるところはない。詳細は別項「横須賀市吉井城山第一貝塚の骨角器（二）」（神沢勇一）を参照されたい。

貝製品：…上部貝層からは貝製品の検出は少ない。下部貝層に多くみられたハマグリ（ハマグリ）の殻縁を連続打欠いて所謂貝刃としたものと同形態のもの四例がある。又、イタガキ及びミルキイの殻の中央部に径2cm内外の丸穴をあけたもの各一例ある。イタガキの身部分の歯部をうまく打欠きとったものが一例ある。海蝕洞窟遺跡（弥生式後期）出土遺物中にも数例あるから、偶然このような形になったものではなさそうである。

四、上部貝層上の土層

上部貝層を覆う土層はI3南端で20cmくらいの厚さであつたがJ3北端では40cmとなり、L3北端では90cmに増した。即ち北方への傾斜に従つ

て土層が厚く堆積していることがわかる。これらの土層の上には四〇cm乃至五〇cmの破碎した貝片を混ざる土層が覆うている。

自然遺物——貝……上部貝層直上は混貝土層を形成しており、これらからは次の貝殻が検出されたがその量は少なく、各貝は何れも小形であり、特記すべきことはない。巻貝九種、二枚貝三種、計一二種が記録された。

巻貝

エザエ レイシ ミガキボラ ツメタガイ イボニシ テングニシ バテイラ アカニシ スガイ

二枚貝

ハイガイ マガキ アサリ

獸魚鳥骨……貝層直上の混貝土層中には獸魚鳥骨が残存しており、次のものが記録された。やはりイノシシとシカが目立つほかは極めて僅かである。本資料も金子浩昌氏の分類によった。

哺乳類

ヒ ト (顎骨・大腿骨)

イルカ (顎骨・脊椎骨・肢骨)

イノシシ (顎骨・牙・肢骨)

シ カ (顎骨・角・肢骨)

魚類

マダイ (顎骨)

クロダイ (顎骨)

カンダイ (咽頭歯)

イシダイ (顎骨)

マグロ (脊椎骨)

コシヨウダイ (顎骨)

両棲類

ウミガメ (肢骨)

人工遺物——土器……上部貝層直上には加曾利EⅢ式とⅡ式の少量と称名寺式などが認められるが、その上方からは称名寺式が目立つて検出され、ほかに堀の内Ⅰ式が検出された。上部土層中には明瞭な層序を認めることができないから従って出土土器の層序も明瞭ではない。細かい破碎貝殻を混ざる表土からは弥生町式と思われる弥生式土器と五領式と思われる土師器の少量を検出した。出土土器の詳細については別項「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器(二)」(岡本勇)を参照されたい。

石器……上部貝層上の土層は層序が明らかでないから出土石器類が何れの土器に伴うものであるかを明らかにすることができないから、記して

も大した役にはたないが一応の記録として次にのせておく。土層中から検出された礫は相当量あり、それらは貝層内検出のものとは差はない。火成岩類は伊豆半島から運ばれたものが多く、石英閃緑岩・輝緑岩のほか古い堆積岩類は小原台。このほか角閃石閃緑岩・石灰質砂岩は対岸久村から西方衣笠方面にわたる地域から採取される。緑泥片岩は秩父方面からの移入であろう。礫の割口の稜を使用したものもあるが極めて少なく、自然石のままを使用した石杵・石皿・敲石・磨石や多少加工したものとして石錘があり、打石斧がある。一例ではあるが磨石斧もある。これらの詳細は別項「横須賀市吉井城山第一貝塚の石器（二）」（赤星直忠）を参照されたい。

五、中間層以上の結び

中間層は混貝土層であり、混貝の状況も一様でなく、それらは明瞭な層序として把握することのできぬものであった。従ってこれらの層内から検出された土器も互の伴出関係を明らかにすることのできぬものであった。下部貝層直上の土器が従来茅山上層式土器と呼ばれたものと同じにみられるものでありながら、これに入海式土器を伴うことが明らかにせられた。中間層の大部分からは関山式土器が検出され、これに混じて、諸磯b式土器・諸磯c式土器・阿玉台式土器・勝坂式土器も検出された。上部貝層直下からは加曾利EⅡ式土器が検出され、上部貝層からは加曾利EⅡ式とⅢ式が検出された。上部貝層はa b二層の重なりが認められているが下部に位置するa層からは加曾利EⅡ式がⅢ式より比較的多く検出され、b層からはⅡ式よりもⅢ式がやや多く検出されたという程度の差異しか認めることができなかった。上部貝層直上からは加曾利EⅢ式が検出され、それより上の土層からは称名寺式・堀之内Ⅰ式が検出されたが量的には称名寺式が多い。これらの土層を覆う細かく破碎された貝片を混在する表土からは弥生町式と思われる弥生式土器と五領式と認められる土師器の断片が少量認められた。これら出土土器の種類は中間層以後この地に生活した人達の古さと、彼らの持っていた文化の一端を示すものである。上部貝層出土の丹塗土器の検討から丹容器としての壺形土器のほか、鉢形土器のあること、文様の一部として丹彩されたものがあること、丹が人工により作られることもあったが天然産のものが多く使われたであろうことにも言及した。下部貝層で圧倒的に多かった礫を打欠いたものをそのまま利器とするものが中間層に尚残存していたが、上部貝層以上にはそれは極めて少量の遺存でしかなくなり、不定形石器は次第に定形石器になってゆくことを示した。中間層からは土偶断欠とみられるものが検出されたが遂にその全貌を明らかに知る資料の検出はなかった。下部貝層で圧倒的に多かった骨角牙器が中間層以上では極めて稀な存在であったことはむしろ意外であった。貝製品としては特記すべきほどのものはない。所謂貝刃の存在はそのものの性格につき今後とも研究が進められるべきも

のであらう。

六、全体の結び

吉井城山第一貝塚は波静かな浅い入江の中ほどに北から南に突出した台状半島の先端にあり、先端部の生活場からその西北に傾斜していた谷間に向ってすてられた廃物によって形成されたことが明らかとなった。貝塚面積の略三分二に及ぶ部分をほぼ完全な形で発掘調査することができ、貝殻を除くほとんどすべてのものは根こそぎ採集するという形がとられたことが今回調査の結果を極めて有力なものとするようになったものである。下部貝層下から表土にわたるまでの間に出土した土器は縄文式土器としては稻荷台式・田戸下層式・子母口式・茅山下層式・茅山上層式・糟畑式・入海式・関山式・諸磯b式・諸磯c式・十三菩提式・阿玉台式・勝坂式・加曾利EⅡ式・加曾利EⅢ式・称名寺式・堀内Ⅰ式の十七形式があり、他に弥生式土器（弥生町式）と土師器（五領式）があった。約七、〇〇〇年にわたり古代民がこの地を入れかわり、たちかわり、生活の場として選定したことを物語るものである。吉井城山の南西中腹には且て横穴三穴が発見された。この横穴を営んだ人達の生活の場所を確認することはまだできていないが、あるいは同じこの台の上ではなかったらうか。平安後期にはこの半島状地形は三浦氏水軍根拠地としての城郭であった。その後はその基部に住みついた農民の畑地として耕されて今日に及んだが、この地にこれほど長く人達をひきつけたものは、地形の優れたことにもあったが、その中央部東側及び西側の山腹に湧出する水の存在が大きい理由であった。縄文時代を通じてこの地が生活地として選ばれたのは入江中に突出した地形が彼らに食料を得させる優れたものであったが、彼らの流浪生活は茅山上層式土器を包含する厚い貝塚を残したとき以外は短期間で他へ移動させたようである。茅山上層式土器を残した下部貝塚の生活は彼らの残した自然遺物・人工遺物によってかなり具体的に知ることができた。貝塚を構成する貝や貝層内に包蔵された自然遺物のあり方によって彼らの自然界に変化があったのではないかとの想像も行なわれたが、貝の小形化は自然界の変化に加えて彼らが貝をとりつくしたとの見方も有力である。従来茅山下部式の後に茅山上層式が来ることが対岸の茅山貝塚の調査によって知られていた。然るに本貝塚においては同じ茅山上層式でありながら、これに東海地方にみられる糟畑式土器が貝層の下部から既に伴出している。これは茅山貝塚では注意されなかったことであり、恐らく茅山貝塚における茅山上層式の後にこのようなあり方が存在するものであり、更にこの後に下部貝層直上でみられたごとき同じ茅山上層式土器に入海式土器が伴出する時期が存在することが確認せられた。茅山貝塚の茅山上層式土器と、吉井城山第一貝塚の下部貝層の茅山上層式土器と、下部貝層直上の茅山上層式土器との相違についてはまだ不明であ

る。これは今後の研究問題の一つとして残されるものである。縄文式文化早期末の骨角器については従来資料が少なく、その全貌を明らかにすることができなかったが、本貝塚では三〇〇にのぼる検出資料によってこれを明らかにした。同じく早期における石器について筆者は早くから、自然礫を割ったものの稜が利器として使用されたものとの見解があったが、今回貝層内の全礫を採集し、これを検討することによって確認することができた。不定形礫器から定形石器への移行という問題に一つの資料を提供するものである。本貝塚中間層からは関山式石器がかなり検出された。従来三浦半島からは関山式石器の発見例が少なく、三浦半島における関山式石器について把握することができなかったが、今回その不備をかなり補うことができたと確信する。上部貝層直下から上部貝層直上にわたり、加曽利EⅡ式石器とⅢ式石器が十分な分量採取され、これがもつ性格を極めてよく把握することができたことは今後同種石器の研究に対して十分な比較資料を提示することができたものである。このほか丹に関する問題、顔料の問題など従来あまりふれられていなかったものについても相当つきこんだ調査をすることができた。そのためには推察された事実を裏付けするためにその場所へ幾度も出かけねばならなかったが幸にも推察したことを次々に事実として把握することができ、古代人の生活を具体的に知ることができたのは短期間に取りまとめねばならなかった本貝塚の調査報告としては大成功といわねばならない。

七、後 記

昭和三五年一〇月二日から三六年三月一九日まで足かけ六か月、実動七五日、延人員五八二名、発掘面積一九〇平方m、約三分の一の部分は深さ四mに達した三浦半島においては最初の大発掘であり、ぼう大な資料を得ることができた。この整理には少くとも五―六年は費されるのが常識であるが、短期間に報告書を出してしまわねばならぬ事情が生じたため、無理を承知で全資料の整理にあたったものであり、このためには横須賀考古学会員諸君その他の多大な援助をうけた。礫の鑑定には横浜国立大学学芸学部の上敬三理学博士、獣魚鳥骨の鑑定には早稲田大学の直良信夫文学博士及び金子浩昌氏のお力をおかりすることができたことに対して深くお礼申し上げるものである。報告書執筆にあたって最も重要な部分である石器に関しては岡本勇氏が、骨角器に関しては神沢勇一氏があたり、その他の部分は赤星があたった。又幸にも人骨に関しては東京大学理学部人類学数室の鈴木尚医学博士の執筆を得られたことは本報告を飾るに充分なものであった。厚くお礼申し上げるものである。今回の調査において果すことのできなかったことは前述のものほか、茅山上層式石器直後文化に関する問題、前期土器への移り変りの問題がある。尚かつて筆者が本貝塚耕土中から採集した銅鏃を残した文化に關しての資料は今回調査の資料中からは極めて微量しか検出することができず未解決に終った。本貝塚に隣接する第二貝塚に対する調査は工事の都合により中止されたが、これは茅山上層式石器を單純に包蔵するとみられる貝塚として、その性格を調査研究することが極めて大切であり、第一貝塚との比較によって極めて有力な結果が得られるものと信じている。不幸にも吉井城山は西半分を切とられ、城郭研究のためにはまことに不幸ではあったが、縄文早期末文化の研究には極めて幸したことになった。聞くところによると、今度は吉井城山東側の水田一帯を埋立てて住宅地に変ずる計画が進められている由であり、その埋立用土を吉井城山の基部にもとめることになっているとのことである。そうなる

と、吉井城山の残部は島状となって城郭としての形態を全く失なうことになる。しかもそのような状況下にあつてはこの島状地帯は恐らく遠からず近接水田地帯の埋立用土の土取場となつて失なわれることであろう。願くば、その以前に第二貝塚の完全な調査が行われるよう祈るものである。

(横須賀市博物館・横須賀市立工業高校)

(註)

- 1、赤星直忠「野島貝塚」考古学集刊第一冊、昭和二十三年
赤星直忠・岡本勇「茅山貝塚」横須賀市博物館研究報告人文科学第一号、昭和三十二年
- 2、赤星直忠「神奈川県三浦郡吉井貝塚調査」史前学雑誌第九卷第六号、昭和十一年

遺跡発見地名表

横須賀市観音崎	横穴群	(二穴)	高橋恭一
同 三春町二丁目	堀内横穴	(一穴)	金野憲昭
同 佐島・深田	深田横穴	(一穴)	森崎隆
三浦市南下浦町松輪・とうつ浜	とうつ浜横穴	(一穴)	浜田勘太
同 同 とうつ山	とうつ山横穴	(一穴)	同
同 同 金田・雨崎	雨崎横穴群	(一〇穴)	横須賀考古学会

一六

同	横須賀市小矢部町樋渡(山畑)	弥生式土器片	赤星直忠
同	同	細田(松郷台)	橋本良雄
同	同	蛭畑	横須賀考古学会
同	同	同	遠藤茂和
同	同	同	宮下幸雄
同	佐野町一丁目ラッパ山	縄文式土器片(加曾利E式)	飯川健二・石渡宏
同	衣笠栄町一丁目ケーネ台	弥生式土器片(久ヶ原式)	小暮鶴五郎
同	吉井町(高坂へぬける山路)	石杵	赤星直忠
同	林・宮前	弥生式土器片(久ヶ原式)	神沢勇一
同	長井町北原	弥生式土器片(久ヶ原式)	富沢隆
同	長坂・大平	縄文式土器片(茅山式)	岡本勇
同	同	石鏃	橋本良雄
同	佐島・萩台	弥生式土器片	赤星直忠
同	高原	縄文式土器片(諸磯式・加曾利E式)	同
同	同	同	同
同	松越とんねる上畑	(茅山式)	同
同	水尾(天神島対岸)	同	同
同	高原(東南端)	弥生式土器片	市工郷土研究部